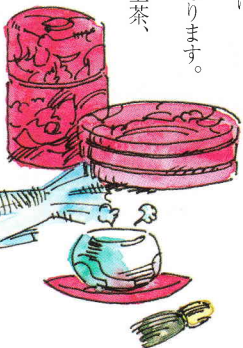


城下町村上には、
伝統をほこる
三つの名物があります。

村上堆朱、村上茶、
そして鮭。

特に鮭は
平安時代の
書物にも
登場するほど歴史が古く
江戸時代からは村上藩の
大きな財源でもありました。



鮭の回帰性を
発見した男

青砥 武平治

●あおと
ぶへいじ

江戸時代の村上。

当時イヨボヤ鮭を
とる権利(漁業権)は
鮭漁の請負人が持ち
彼らが運上金を藩に
納めるというかたちで
村上藩の大きな
財源としていました。

しかし、江戸時代の
中頃になると

イヨボヤの数が減り、
以前は三百両以上
あった運上金が

藩主

内藤紀伊守信興侯
の時には五両、そして
全く入らない時さえ
ありました。

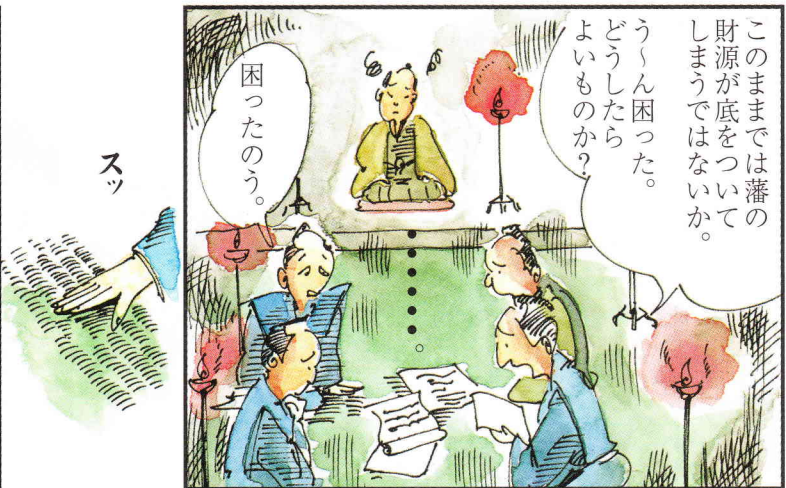


このままでは藩の
財源が底をついて
しまうのではないか。

うくん困った。
どうしたら
よいものか？

困ったのう。

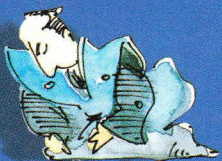
スッ



殿

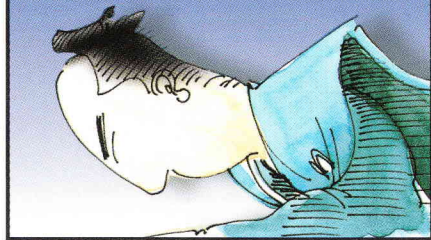


郷村役の
青砥武平治にて
ござりまする。



ぜひ

お話を聞いて
いただきました
ありがとうございました。



むむつ
申してみい。

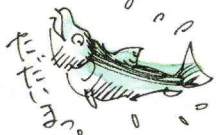


私は河川工事に
かかわっておりますが、
イヨボヤの生態にも
関心を持ち、常日頃から
研究してまいりました。



その結果

イヨボヤは生まれ育った川に
帰るといふ回帰性がある
ことに気づきました。
この習性をイヨボヤの増殖に
活用してはどうかと考
えまじました。

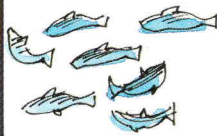
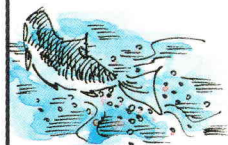


どう利用するのじゃ？

帰ってきたイヨボヤは卵を産みます。
その子らを育てること

イヨボヤの豊漁につながります。

イヨボヤ産卵 ↓ 稚魚 ↓ 豊かなイヨボヤ



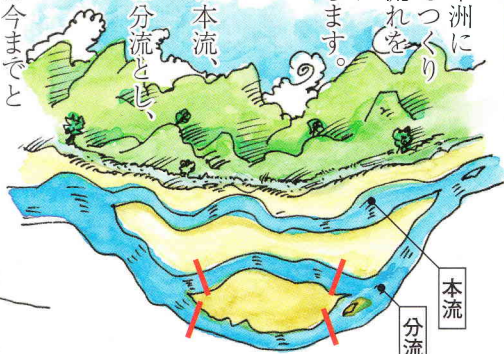
そのためにはどうすればよいのじゃ？



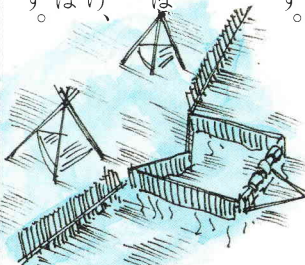
川の中洲に
分流をつくり
川の流れを
三筋に
いたします。

一本は本流、
二本は分流とし、
本流は今までと
同じように
漁をいたします。

そして分流には
上流と下流に
止め簀をもうけ、
下流の止め簀は
開閉式にします。



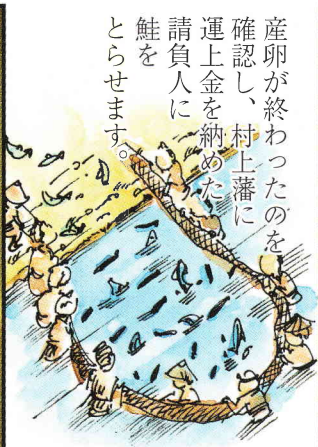
下流の止め簀



この分流を

鮭の種川たねかわと命名

村上藩ではこの種川を制度としました。



産卵が終わったのを確認し、村上藩に運上金を納めた請負人に鮭をとらせます。

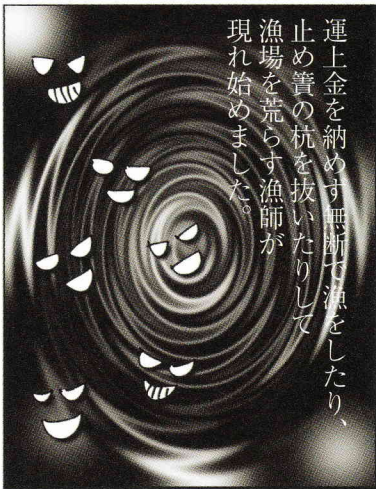
そこにのぼってきたイヨボヤを入れ、産卵が終わるまで漁をいたしません。



この功績で武平治は七十石取りの身分に出世しました。

しかし――。

運上金を納めず無断で漁をしたり、止め簀の杭を抜いたりして漁場を荒らす漁師が現れ始めました。



これらに対し、藩は高札を掲げ

これを禁止しました。

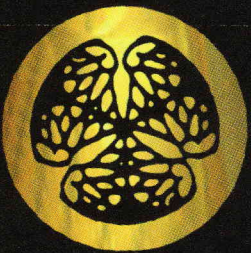


冗談じゃないこつちも生活がかかってんだ

そうだ！
そうだ！
ブー！！

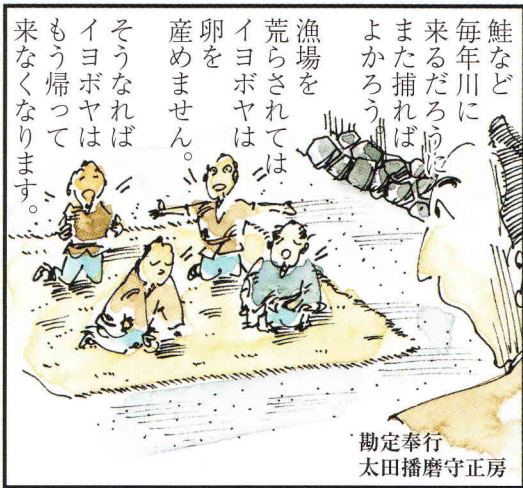


一部の漁師の訴えにより幕府は許可なく種川で漁をすることのできない理由を村上藩に求めました。





江戸辰口評定所



勘定奉行
太田播磨守正房

鮭など
毎年川に
来るだるゆ
また捕れば
よかるう
漁場を
荒らされては
イヨボヤは
卵を
産めません。
そうなれば
イヨボヤは
もう帰って
来なくなり
ます。



うーん

イヨボヤは

イヨボヤは
我々の命なのです。

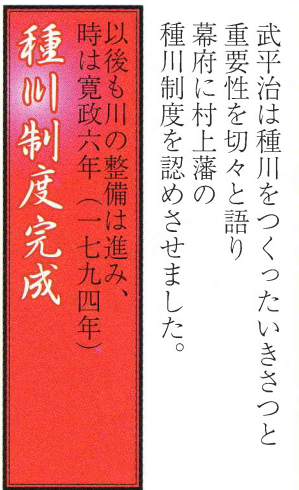


青砥武平治
この時六十二歳



イヨボヤは我々の
宝であり、
生活の源でも
あるのです。
やみくもに
捕ってはイヨボヤが
絶えてしまいます。

そのために種川を
つくったのです。



種川制度完成

武平治は種川をつくつたいきさつと
重要性を切々と語り
幕府に村上藩の
種川制度を認めさせました。

以後も川の整備は進み、
時は寛政六年（一七九四年）

村上藩が行つたこの制度は、
世界の水産史上でも類をみない
鮭の自然ふ化増殖です。

こののち明治初期からは
人工ふ化増殖に変わりました。
明治十七年には七十三万匹捕れたという
記録が残されています。



イヨボヤを育てることは
自然を大切にすること
イヨボヤの
豊富な川を持つことは
自分たちの文化を
つくりあげること

これが
青砥武平治の
熱い
思いなのです。